〔新撰六帖一〕はつかの月

長月のはつかの月を待出て我ためみつと妹ゑるらめや　家良

〔運歩色葉集阿〕有明　在明

〔書言字考節用集二乾坤〕殘月又云破鏡アリアケノツキ　顏魄同

〔倭訓栞前編阿三〕ありあけ　有明の義、十六夜以下は、夜は已に明るに、月は猶入らで有る故にいふなり、

〔枕草子十二〕ある所に中の君とかやいひける人のもとに、君達にはあらねども、其心いたくすきたるものにいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりにいきて、有明の月のいみじうてりておもしろきに、名殘おもひ出られんと、ことのはをつくしていへるに、今はいぬらんと遠く見おくるほどに、えもいはずえんなるほど也、出るやうに見せてたちかへり、たてじとみあいたる陰のかたにそひ立て、猶ゆきやらぬさまもいひしらせんと思ふに、有明の月のありつゝもとうちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月のひかり、もよほされて、おどろかさるゝ心ちしければ、やをらたちいでにけりとこそかたりしか、

〔拾遺和歌集十戀三〕だいしらず　人まろ

長月のあり明の月のありつゝも君しきまさば我戀めやも

〔萬葉集十秋雜歌〕詠月

白露乎、玉作有、九月、在明之月夜、雖見不飽可聞、シラツユヲ　タマニナシタル　ナガツキノアリアケノツクヨ　ミレドアカヌカモ

〔源氏物語二帚木〕月はあり明にて、光をさまれるものから、影さやかにみえて、中々をかしきあけぼのなり、